

# 西上総地域の古道跡

—いわゆる鎌倉街道を中心として—

大谷 弘 幸

## 1. はじめに

近年、古代を中心にして道路跡の検出が相継いでいる。また調査事例の増加は研究活動を活発にさせ、古代交通研究会の発会と機関誌『古代交通研究』の刊行、『季刊 考古学』における特集「古代の道と考古学」など、目を見張るものがある(註1)。

これに対して、中世の街道や交通網に対する研究や発掘調査の事例は少なく、鎌倉における若宮大路の調査や、東京都から埼玉県内にかけて行われている鎌倉街道上ノ道に関連する研究と発掘調査が知られるのみであり、それらの研究も緒に付いたばかりと言える(註2)。

ところで、西上総地域を流れる小櫃川流域ではここ数年、東関東自動車道の建設や県道・市道の整備などにより各地で発掘調査が盛んに行われている。こうした調査のなかで袖ヶ浦市荒久遺跡、山谷遺跡、文脇遺跡、木更津市芝野遺跡、菅生遺跡など、それぞれ性格の異なる中世遺跡が発見され、当地域における中世史研究は飛躍的に進展したと言えよう(註3)。

そこで小稿では、小櫃川流域から養老川流域のあいだ、現在の袖ヶ浦市北部と市原市南西部を対象として、遺跡と遺跡とを結び具体的に物資を運搬したであろう道路に着目して、従来の研究成果や、新たに発掘調査で得られたデータを交えて、当地域に点在する伝承鎌倉街道を中心とした古道跡について検討を加えてゆきたいと思う。

## 2. 研究略史

西上総地域における古道跡の研究は、他地域と同様に古代駅家所在地に関する研究から出発している。吉田東伍氏の『大日本地名辞書』を初めとして坂本太郎氏や大脇保彦氏などの諸研究は先駆的な業績で、現在においても駅家所在地に関する研究に大きな影響を与えている(註4)。しかしながら、それらの研究主眼は点としての駅家に注

がれており、線としての具体的な道路(駅路)の復元には及んでいなかった。

これに対して小熊吉蔵氏は、「西上総に於ける古街道と国府郡家所在地との関係」において、現木更津市中烏田に存在する道標を手がかりとして、小字名や郡境等を丹念に調べ、現地を歩いて具体的な古道のルートを推定する方法を取っている(註5)。この方法は、現在木下良氏を中心に進められている駅路の歴史地理学的復元の方法とも一致する点が多く注目されよう(註6)。

その後の須田勉氏による研究も、基本的には小熊氏の成果を踏襲したものである(註7)。

次項においては、改めて古道に関連する小字名について、分布のうえから再検討を行いたい。

## 3. 古道関連小字名の分布

ここでは、『袖ヶ浦町史』通史編 下巻(付図)の「袖ヶ浦町小字地図」と『千葉県市原市地名集』、『市原市小字名図』をもとに「カマクラカイドー」、「オオミチ」、「カイドー」等、古くはその周辺に、地域の主要道路があったことを想像させる小字名をピックアップした(註8)。

その結果を示したのが第1・2図である。これによると古道関連の小字名は、現在もなお使用されている道路の路線上に多く存在していることがわかる。また、これらの道路は、沖積低地や分水嶺上をほぼ直線に通る傾向が認められる。

次にこの古道関連の小字名と想定される道路について、若干説明することとしたい。

まず、袖ヶ浦市下新田から市原市立野にかけて台地上を東西に貫く道路周辺には、袖ヶ浦市野田字鎌倉街道「カマクラカイドウ」、川原井字鎌倉通「カマクラドウリ」、市原市中高根字大街道「オーカイドー」、立野字鎌倉街道「カマクラカイドー」などの名称が存在し、鎌倉との関係を示す小字名が多く見られる。(下新田—立野ルート)

また、木更津市大寺から袖ヶ浦市蔵波にかけて、

沖積低地から台地上へと南北に進む道には、低地部分に袖ヶ浦市飯富字浜道「ハマミチ」、字中道「ナカミチ」が(註9)、台地部分に飯富字浜街道「ハマカイドウ」、神納字西浜街道「ニシハマカイドウ」など海岸部との関係を連想させる地名が残っている。(大寺-蔵波ルート)

市原市天羽田付近から椎津にかけて、台地上を南北に通る道については、椎津周辺においてこの道を通称鎌倉街道「カマクラカイドウ」と呼んでいる。(天羽田-椎津ルート)

さらに、市原市立野から姉崎に向かって台地上を南東から北西に走る道では、今富字大道「ダイド-」、姉崎字道ヶ窪「ミチガクボ」、字道ノ下「ミチノシタ」、字大道「オオミチ」など、古道に関連する地名が散見される。(立野-姉崎ルート)

このほか、袖ヶ浦市蔵波の台地上にも、蔵波字鎌倉街道「カマクラカイドウ」の名称が残っている。(蔵波-長浦ルート)

以上のように小櫃川から養老川にかけての地域には、古く遡れると考えられる道路が少なくとも5ルートあることが確認された。

#### 4. 各古道ルートの検討

本項では、先に指摘した5ルートのうち、想定線上で発掘調査が実施されていない蔵波-長浦ル

ートを除く4ルートについて、さらに細かく検討を加えることとしたい。

##### (1)下新田-立野ルート

このルートは、古く小熊吉蔵氏によって鎌倉街道として紹介されたもので、台地上を東西に弓なりに約10kmにわたって通っている。またその一部は旧郡境ともなっており、宝亀2(771)年に武蔵国が東山道から東海道に編入されるまで、ここが古東海道の本道であったであろうことを指摘している。その後、須田勉氏によってこの説は、さらに古代寺院との関係から積極的に支持されている(註10)。

この道は、小熊氏が踏査した昭和初期においては、道幅4~5間(7~9m)で両側には土手が築かれていたとしている。その当時においては土手の時期を明確にはしていないが、土手上に桜の古木があることから、一部のもは古い築造であった可能性を指摘している。

なおこのルート上では、袖ヶ浦市七人堀込遺跡、山谷遺跡、市原市外迎山遺跡の3遺跡で、古道に関連する遺構の調査が実施されている。以下にその概略を述べることにしたい。



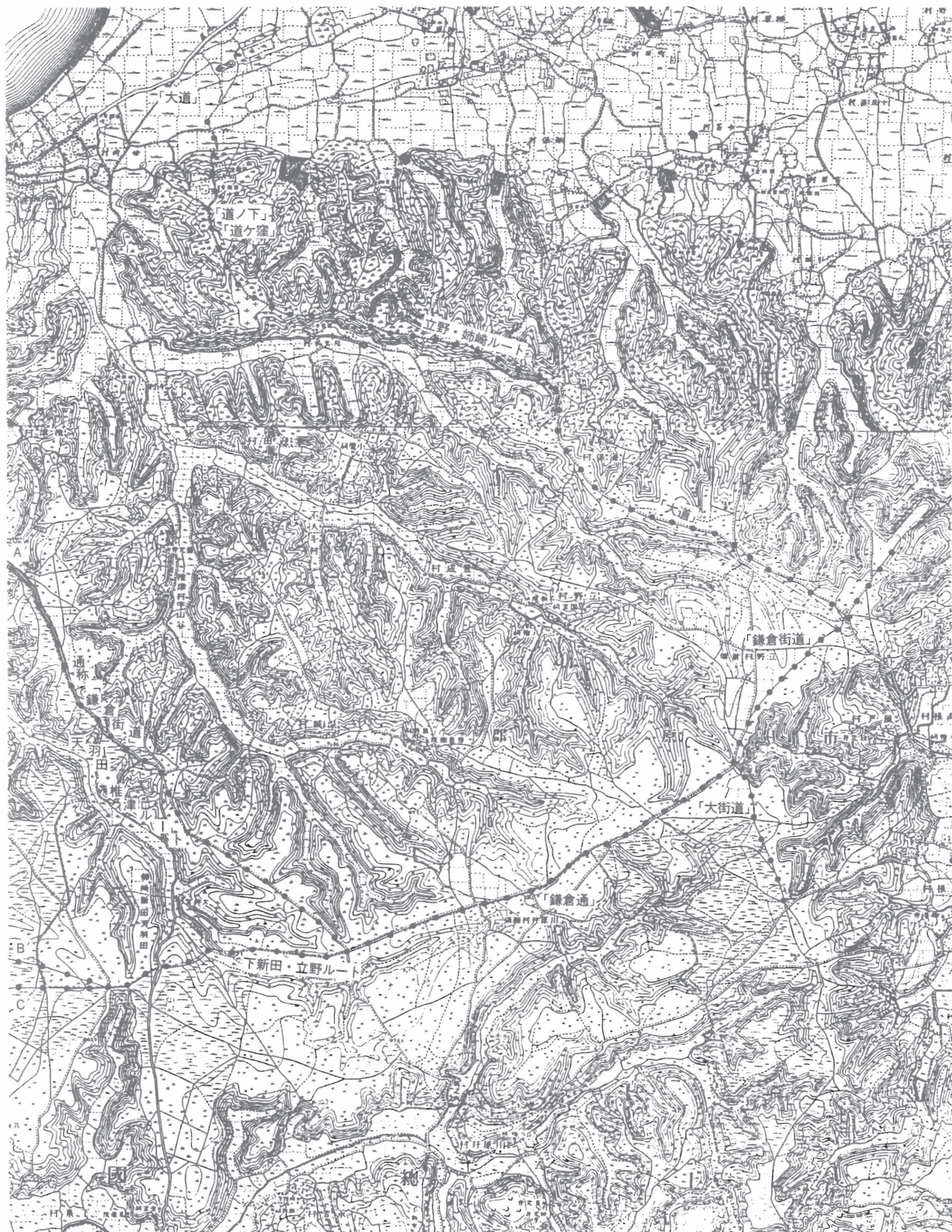
写真1 下新田-立野ルート袖ヶ浦市萩原野付近(東より)





第1図 小字名と古道跡(1) 1/40,000 (陸軍迅速図使用)





第2図 小字名と古道跡 (2) 1/40,000



### ①七人堀込遺跡（註11）

袖ヶ浦市野田字七人堀込に所在しており、平成3（1991）年に君津郡市文化財センターにより調査が行われている。遺跡は南北に開析した谷の最深部に位置し、標高約34mを測る。調査は市道の拡幅工事にともなって拡幅部分についてのみ行われ、その結果、柱穴列1条、ピット群2カ所、土坑4基、溝状遺構23条、道路遺構8条、水田状遺構1カ所、硬化面遺構1カ所が検出されている。

これらのうちで、溝状遺構と道路遺構の多くが現道と並行して検出されており、この道が何回かの造り替えをへて使われ続けていたことを示している。

また、報告書中においては、現道部と重複して検出された第8号道路遺構と、これに並行して検出された第1・2・8号溝状遺構について、古代に遡る道とそれに伴う側溝であると考え、路面幅11.5m～11.8m、溝間心々距離12.7m～13.1mのものを想定復元している。また時期については、第8号溝状遺構の覆土下層出土の土師器などにより、10世紀後半には存在していたとの見解を示している。

このような内容から担当者は、この道が古東海道であった可能性を指摘している。

### ②山谷遺跡（註12）

袖ヶ浦市野田字鎌倉街道に所在しており、先述の七人堀込遺跡から300m東に位置している。遺跡は標高約52mの台地平坦部にあり、東関東自動車道の建設に先立って平成4（1992）年から継続して千葉県文化財センターによって調査が行われている。

これまでのところ、古道跡のほか掘立柱建物、井戸跡、地下式土坑、土葬墓などが検出されており、古道を中心にして展開する墓域と「市」機能を有する集落域とが想定されている。

古道跡は現道を踏襲する形で検出されており、形態的には逆台形の切り通し形をしている。道としてはやや蛇行しており、上端部分においても幅広の場所と狭い場所との差が激しく、最大で約10.0m、最小で4.5mを測る。また、道路面については現道以前に数枚の硬化面が確認されており、一番古い面は現道から0.6m～1.0m下がったところで検出されている。このほか、硬化面に沿って側溝

と考えられる溝が新旧2条検出され、側溝心々間の距離は最大4.5m、最小で2.4mを測る。

なお遺構の年代については、新しい方の側溝覆土上部から15世紀代の遺物が出土しており、同時期には、側溝の機能は停止していたと考えられる。また、道路底面から若干上がったところで宝永4（1707）年降下の富士火山灰が検出されていることから、近世初頭以降特に埋没が進み、道としての機能は低下していったものと考えられる。

### ③外迎山遺跡（註13）

市原市風戸字入口ノ沢に所在する遺跡で、標高約81mの台地上に立地している。調査は姉崎カントリークラブゴルフ場増設にともなって、昭和60（1985）年に市原市文化財センターによって実施されている。

その結果、方形周溝状遺構28基、方墳2基などが検出されている。また道跡に関しては、推定古道ともなう土塁に対して2本のトレンチを設定して調査を行っているが、時期を決定するような成果は得られていない。

このほか、このルートの西側延長線上に位置する境No.2遺跡においても、このルートに方向が一致する溝が3条検出されているが、道との関係を示すデータは得られていない（註14）。

つぎに以上の調査成果を踏まえて、下新田一立野ルートについてまとめることとしたい。

まず形態についてであるが、七人堀込遺跡のような比較的低平で湿地化した状況の場所においては、両側に側溝を持ち中央の道路面を周囲よりも一段高くした構造が想定されよう。これに対して台地上では、周囲よりも一段掘り下げた切り通し状の形態が考えられる。また規模については、山谷遺跡や山谷遺跡と七人堀込遺跡との間にある切り通し部分、他の現道部分の状況から考えると6m以下で若干蛇行した道路であったと推定され、七人堀込遺跡で復元したような12m級で直線的な道路は想定しにくいと言えよう（註15）。

この道路の時期については、山谷遺跡では側溝を伴う道の最終段階が15世紀との結果が得られている。また七人堀込遺跡における土師器細片が遺構の時期を反映しているとするならば、10世紀後半以前が想定される。このほか、この道路から中



高根で分岐して川原井方面へ向かう、幅1.6mで深さ0.1~0.4mの溝状の道路跡が調査されており(中高根・南名山遺跡)、覆土中から8世紀中頃の土師器片が出土している(註16)。これらのことを考え合わせると、道路の築造が古代まで遡れる可能性も指摘できよう。

先述のとおり、このルートに関しては、小熊氏や須田氏によって古東海道として想定されて以来、その説は長く支持されてきたところであった。近年、駅路と考えられる道路遺構が各地で発見されており、関東地方においても東山道や東山道から武蔵国府に向かう支路(東山道武蔵路)に関連する遺構が発掘されている。これらの官道跡は、両側に側溝を伴い直線的に造られるという共通する特徴を持っている。また、規模については8世紀代に属するものは、側溝の心々距離が12~13mを測るものが多く、9世紀代になると規模が小さくなり、溝の心々距離が6m前後になる傾向が指摘されている(註17)。このような成果と照らし合わせて考えた場合、下新田-立野ルートが時期的には古代まで遡る可能性を残しながらも、それが古東海道駅路であった可能性は低いと言える(註18)。ただしこのルートは、西ではこの先三ツ作付近で南に折れて望陀郡家推定地である下望陀へ、東では北上して上総国府推定地がある市原地域へ続く

と想定されることから、伝路を含め当地域における主要道であったことは十分考えられよう。

なお山谷遺跡の例から、この道は15世紀には側溝も伴わなくなり、近世初頭にはさらに埋没が進んで主要道としての機能は一層低下し、整備も行われなくなっていたと考えられる。

## (2)大寺-蔵波ルート

このルートは、木更津市大寺から袖ヶ浦市蔵波までの約4kmにわたって南北にほぼ直線に造られている道路である。ルート上には、7世紀後半に建てられた上総大寺や式内社で藤瀧駅の推定地となっている飽富神社などが所在しており、飯富から蔵波にかけての台地部分は、飽富神社の祭礼に際して神輿を海中にある神手洗井(みたらし)と呼ばれる清泉の湧き出る場所へと運ぶ通路として使用されてきたことが知られている(註19)。またこの部分は、神納と飯富との大字境にもなっている。

なおこの付近では、寒沢遺跡、向萩原遺跡、向山野遺跡の3遺跡が調査されている。

### ①寒沢遺跡、向萩原遺跡、向山野遺跡(註20)

この3遺跡は、それぞれ袖ヶ浦市蔵波(寒沢)、神納字向萩原(向萩原)、字山ノ久保(向山野)に



写真2 下新田-立野ルート袖ヶ浦市西萩原付近の遺構断面





第3図 西上総地域の古道跡と遺跡 (註13文献中の図をもとに作成)



所在し、標高30m前後を測る台地平坦部に位置している。調査は昭和61(1986)年から平成2(1990)年にかけて、現道部分の改良工事に先立って君津郡市文化財センターによって実施された。

その結果、現道に並行する道跡や溝跡が多数検出されたほか、この道から枝分かれした道跡などが検出されている。これらの遺構のほとんどが近世以降の所産であるとされているが、寒沢遺跡においては、宝永の富士火山灰下においても数面の道路跡が検出されていることから、少なくとも中世段階まで遡る可能性が高いものと言えよう。

### (3)天羽田－椎津ルート

このルートは、市原市天羽田から椎津にかけて分水嶺上を約5kmにわたって南北に走っており、このうち現椎津台付近から海岸部にかけては、旧望陀郡と市原郡との郡境になっている。

#### ①椎津中林遺跡(註21)

この推定ルートのほぼ中間地点に位置する市原市椎津に所在している。遺跡は標高50mの台地上に立地し、調査は現道の改良工事に先立って、昭和60(1985)年に市原市文化財センターによって行われた。その結果、現道に並行する中・近世の道跡が4条検出された。調査対象地に現道部分が含まれていないため全容は把握できないが、4条うちの1条は中世以前の遺構と考えられている。

また、調査区に隣接して寛政8(1796)年造立の道標があり、右側面には「南たかくら道」、左側面には「北ちばでら道」と刻まれていることから、一部分は近世において巡礼街道として利用されていたことが窺われる。なおこの道には古くは両側に土塁があったとの伝承が残されている。

天羽田－椎津ルートは先述の下新田－立野ルートから天羽田で枝分かれしたコースをとっており、下新田－立野ルートと海岸部分とを結ぶ支路的役割を果たしていたものと考えられよう。また下新田－立野ルートと同様に、旧郡境が古代以来継承されてきているものと仮定するならば、このルートの成立時期についても古代まで遡らせて考える必要もあろう。なお南側の延長線は恐らく近世の久留里西往還へとつながっていたものと想像される。

### (4)立野－姉崎ルート

このルートは市原市立野から姉崎にかけて、台地上を東西方向に約6kmにわたって続いており、一部では大字境となっている。ここでは今富大道遺跡、海保野口遺跡、六孫王原遺跡の3遺跡で、道に関連する遺構の調査が実施されている。

#### ①今富大道遺跡(註22)

標高約70mの台地上に立地している。調査は現道の改良工事に先立って、昭和61年(1986)年に市原市文化財センターによって行われている。その結果、現道に並行して溝及び性格不明の大型遺構、道路跡などが検出された。

このうち性格不明の大型遺構については、遺構が全掘できなかったため、方形の平面プランを持った形態、細長な溝状の形態などが推定されているが、大型遺構にそって東西に延びる溝も一連の遺構として考えるならば、長さ200mにもおよぶものとなる。おそらく形態的な面や現道との関係から考えると、道路に関連する遺構であると考えた方が妥当であろう。

なお、溝と大型遺構の年代については、遺構内覆土の下部に宝永火山灰の堆積が認められることから、少なくとも18世紀初頭には埋没していたことが確認されている。

このような現道に並行した溝状遺構は、海保野口遺跡や六孫王原遺跡においても確認されているが、報告書等が未刊のため詳細は不明である(註23)。

以上このルートについてまとめると、天羽田－椎津ルートと同様に下新田－立野ルートから枝分かれして、姉崎神社を經由して海岸部へと続く支路的な役割を推定することができる。また、今富大道遺跡の成果から、近世初頭には道としての機能は低下していったものと考えられる。

## 5. まとめ

これまで見てきたように、西上総地域における古道跡の推定について、道関連の小字名の分布とこれに対する近年の考古学的成果から検討を加えてきた。それらから明らかになった古道跡の特徴は、次のようにまとめることができる。

1) おもに分水嶺上に沿って、比較的直線傾向に造られている。



- 2) 道が旧郡の境、または大字境となっている。
- 3) 硬化面が累層的に認められることや溝の度重なる掘削から、道の維持管理のためかなりの回数の再整備が行われたと考えられる。
- 4) 台地上では切り通し状の形態、低地では断面が台形を呈するような形態であったと考えられる。
- 5) 道路の多くが、やや埋まりかけた段階で宝永の火山灰を包含しており、近世初期にはこれらの道の維持管理が低下していることを物語っている。

また、これまで述べてきた4つのルートと比較すると、下新田－立野ルートの一つの幹線として捉えることができ、天羽田－椎津ルートと立野－姉崎ルートは、それぞれ下新田－立野ルートから分岐して海岸方面へと進んでいることから、下新田－立野ルートの支路的な性格が想定されよう。

しかしながら、この下新田－立野ルートにおいても、従来言われてきた古東海道とする説については、近年各地で検出されている駅路と比較した場合、否定的な要素が多いものと言える。むしろ下新田－立野ルートから枝分かれしたルートが、海岸部を目指した方向性を取っていることを考えると、近世の房総往還のような海岸線に沿ったルートが古くから存在していたものと思われる。

このほか大寺－蔵波ルートについては、上総大寺や飽富神社との関係やルートのにも下新田－立野ルートから分岐していないことから、下新田－立野ルートの支路的性格を考えるよりも別の独立したルートであった可能性が高い。

なおいずれの道路についても、成立時期を明確にする資料は得られていない。しかし出土遺物の様相や周囲の状況を考え合わせるならば、少なくとも中世段階には成立していたものと思われ、古代にまで遡って考えた方がよい例もある。

また、これらのルートは、近世初頭に街道・交通網の再整備が行われたことにより、主要道としての役割が低下していったものと考えられる(註24)。

以上のように、西上総の古道跡について長々と述べてきたが、近年の発掘調査の多くが現道部の拡幅工事によるもので、調査面積も少なく、道の形態や成立時期については不明な点が多々ある。また、遺構の性格についても道と切りはなしたも

のを想定され易く、広い地域的視点に立って遺構の性格を考える時期が訪れてきているものと言える。今後は東京湾、小櫃川、養老川等の水上交通を含め、古代以降の集落立地の背景や荘園との関係、中世における間などを中心とする交通網との関係を具体的に明らかにできればと考えている。

最後に、本稿を起すのにあたって木下良、近藤敏、柴田龍司の各氏には、資料の提供や多方面にわたるご教示を得た。記して感謝したい。

## 註

- 1 古代交通研究会 1992～ 『古代交通研究』  
木下良編 1994 「特集 古代の道と考古学」  
『季刊 考古学』第46号 雄山閣
- 2 柿沼幹夫 1992 「鎌倉街道と沿線の遺跡の保存について」 『日本歴史』 吉川弘文館  
宮瀧交二 1993 「旧武蔵国域における「鎌倉街道」研究の現状と課題」 『堀難井遺跡』  
狭山市遺跡調査会  
宮田太郎 1993 「中世の道を探る」『新視点  
日本の歴史』第4巻 新人物往来社
- 3 柴田龍司他 1993 「特集 小櫃川流域の中世遺跡」『研究連絡誌』第37号 千葉県文化財センター
- 4 吉田東伍 1907 「坂東」『大日本地名辞書』  
富山房  
坂本太郎 1989 『古代の駅と道』坂本太郎  
著作集8 吉川弘文館  
大脇保彦 1978 「第二章東海道 第十四節  
上総国」 藤岡謙次郎編『古代日本の交通路Ⅰ』  
大明堂
- 5 小熊吉蔵 1932 「西上総に於ける古街道と  
国府郡家所在地との関係」『史蹟名勝天然記念物』第七集  
小熊吉蔵 1933 「鎌倉街道」『史蹟名勝天然  
記念物』第十集  
小熊吉蔵 1935 「千葉県に於ける王朝時代  
郡家の遺蹟」『史蹟名勝天然記念物』第十二集
- 6 木下良 1990 「日本古代律令期に敷設された直線的計画道の復元的研究」『平成元年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書』  
木下良 1994 「古代道路の研究」『季刊 考古学』第46号 雄山閣
- 7 須田勉 1978 「川原井廃寺と古代東海道」



- 『南総郷土文化研究会誌』第十二号
- 8 袖ヶ浦町史編さん委員会 1985 『袖ヶ浦町史』通史編 下巻  
市原市教育委員会 1978 『千葉県市原市地名集』  
作者不明 1971頃 『市原市小字名図』  
小字名がどの時代まで遡った状況を示しているかは明らかにし得ないが、現在農道としてわずかに使用されている道路について名称が残っていることを考えると、かなり以前の伝承を反映したものと思われる。
- 9 『袖ヶ浦町史』によれば、寛文元(1661)年の「斎藤品二家文書」には「たいし道」とあるが、今回それと浜道、中道との関係を調べるまでには至らなかった。
- 10 前掲註5および7
- 11 諸墨知義 1992 『七人堀込遺跡』 君津郡市文化財センター
- 12 千葉県文化財センター 1993 『山谷遺跡現地説明会資料』  
なお山谷遺跡の詳細な内容については、同誌上の柴田氏論文を参照されたい。
- 13 木對和紀 1987 『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』 市原市文化財センター
- 14 牛房茂行 1985 『境No.2遺跡』 君津郡市文化財センター
- 15 このほか袖ヶ浦市西萩原付近においても、幅5m前後の道路跡の断面が確認できる。(写真2)
- 16 田所真 1987 「中高根・南名山遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和62年度』 市原市文化財センター
- 17 木下良 1990 「日本古代の道幅と構造」『交通史研究』24  
木下良・坂詰秀一 1994 「対談・古代の道を語る」『季刊 考古学』第46号 雄山閣
- 18 これまで上総国内の駅家については、『延喜式』に記載された4カ所の駅に関して現地比定する研究が進められてきた。このうち嶋穴駅については、市原市島野の嶋穴神社とする説が有力である。また、藤瀧駅についても袖ヶ浦市飯富の飽富神社とする説が示されている。もし仮に、嶋穴・藤瀧の両駅が推定どおり島野・飯富であり、しかも『延喜式』記載の駅名が古東海道の駅名を示しているものとなれば(『延喜式』が編纂された10世紀段階では、すでに上総国は東海道の本道から外れている。)、下新田-立野ルートはかなり迂回したコースとなり、駅間の最短距離を通して情報を素早く伝達する駅制の考え方も矛盾することとなる。
- 19 前掲註8『袖ヶ浦町史』
- 20 能城秀喜 1991 『寒沢遺跡、向萩原遺跡、向山野遺跡』 君津郡市文化財センター
- 21 宮本敬一 1985 「椎津中林遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和60年度』 市原市文化財センター
- 22 米田耕之助 1988 『今富大道遺跡』 市原市文化財センター
- 23 千葉県文化財センター 1990 『千葉県文化財センター年報 No.15』  
市原市文化財センター 1992 「六孫王原遺跡」『第7回市原市文化財センター遺跡発表会要旨』
- 24 これに先立って、15世紀後半の真里谷武田氏の領国支配により、それまでの交通路に大きな変化があったとの指摘もある。  
笹生衛・柴田龍司 1993 「小櫃川流域における中世遺跡の変遷」『研究連絡誌』第37号 千葉県文化財センター